『成安造形大学紀要』第 15 号（2024 年 3 月 31 日刊行）

「ローカリズム×万博×デザイン」による フィールドパビリオンプロジェクトの報告 ～多文化共生のまちづくりと共に考える 「アンランゲージデザイン」の可能性～

Report on the Field Pavilion Project: Exploring the Potential of ‘Unlanguage Design’ for Multicultural Coexistence through Localism, Expo, and Design

柴﨑　寛子
SHIBAZAKI Hiroko

ローカリズム×万博×デザインによる フィールドパビリオンプロジェクトの報告 ～多文化共生のまちづくりと共に考える「アンランゲージデザイン」の可能性～

Report on the Field Pavilion Project: Exploring the Potential of 'Unlanguage Design' for Multicultural Coexistence through Localism, Expo, and Design

柴﨑　寛子
SHIBAZAKI Hiroko

非常勤講師（地方創生デザイン）

The author as a local designer, explores the potential for a multicultural society through interaction with the Brazilian community. Emphasizing communication through local revitalization initiatives using food and festivals, the focus is on fostering connections, particularly with Japanese-Brazilians. The proposal introduces "Unlanguage Design," highlighting the necessity of community collaboration for multicultural coexistence. The conclusion underscores the importance of community cooperation for providing opportunities for understanding, challenging stereotypes, and creating enjoyable spaces to advance multicultural coexistence.

1. はじめに

本稿では、私の日系ブラジル人コミュニティとの関わりをふり返るなかで、その取り組みをひとつの事例として、これからの多文化共生社会とデザイン視点での関わり方について考える。

私は商業デザイナーとして、大小様々な企業や事業者の広告マーケティングに身を置いてきた。しかし活動の幅を広げる挑戦がしたいと 2019 年夏、現在住んでいる滋賀県湖南市に地域おこし協力隊の一員というかたちで移住をする [註1]。長らくデスクワークに偏っていた自身のデザインの在り方を見直し、まちやひととの関わりのなかで、自分の仕事との向き合い方や新しいフィールドを探してみたかったのだ。そんな私の地域おこし協力隊としての活動テーマは、『タピオカ研究所』という一見ポップなタイトルが掲げられた、"食文化と国際交流" を扱う地方創生事業だった。

図 1. 筆者が栽培収穫したキャッサバ芋

2. 活動テーマの『タピオカ研究所』とは

「タピオカ」と聞くと、2019 年前後に日本で大流行していたスイーツ・ドリンクとしてのイメージを思いうかべるほうが多いと思われるが、実はそのタピオカの原材料となるキャッサバ芋がここ湖南市の一部では栽培し収穫されている。それはなぜか。湖南市にはブラ

図 2.　市内のブラジル人農家

図 3.　皮を剥き茹でたキャッサバ芋

ジル人労働者が多数在住しており、彼らの主食とされるほど馴染みある食べ物がまさにそのキャッサバ芋だったからだ。

キャッサバ芋の原産地は中南米の比較的熱帯地域で、栽培しやすく荒地でも収穫可能なことからアジアやアフリカなど世界各地に広がった。その異国の食文化＝タピオカというキーワードから、湖南市におけるブラジル人との国際交流を活性化できないだろうかというのが、このタピオカ研究所の事業に設定されたテーマであった。かくして私はタピオカをきっかけに、フィールドワークを通じてブラジル人コミュニティとの関わりや国際交流の在り方、その実情や課題の知見を現場で深め、いかにして湖南市の魅力として発信するかを模索する日々が始まった。

3.　滋賀県湖南市人口統計と外国人国籍比率

湖南市は滋賀県南部に位置し、大阪や名古屋方面への交通アクセスの良さもあり、製造業や運輸業などの二次産業が発展した。市内東部に位置する下田エリアには県内最大の工業団地があるため、その労働力として人口５万５千人のうち、約 6% が海外人労働者［註 2］であり、人口比率でいうと県内トップなのである。とりわけブラジル人が多くおよそ半数を占め、続いてベトナム、ペルーなど様々な国籍の人が暮らしている［註 3］。そういった理由から、市内各所で日系ブラジル人を見かけることが多い。

4.　湖南市における多文化共生の現状と課題

湖南市の行政サポートは、時代や要望に合わせ充実化を図っており、多文化共生社会の実現をめざし取組むための多文化共生推進プランの策定［註 4］を進めてきた。また市には「湖南市国際協会」という任意団体［註 5］もあり、多文化共生をテーマに国際交流事業や言語教室、生活サポートなどの外国人支援事業、ボランティアの発掘・養成なども行なっている。しかし世界情勢やさまざまな影響から問題が複雑に絡み合い、解決も難しい状況なのだ。そして多文化共生の普及促進活動には参加者の偏りがあり、多くの日本人と外国人市民が参加しやすい状況とは言えず、地域コミュニティに溶けこみ心と心を通わせ合う機会は限られている。

違う文化に触れることでわたしたちが学ぶべき点は大きい。特に若いうちからさまざまな体験や価値観に出会っているかどうかは、これからの国際化日本社会にとって重要だろう。偏見や差別的な態度に触れた時に立ち止まり考えるきっかけをくれるはずだ。日系ブラジル人はじめ、その他の外国人市民［註 6］やその子どもたちが地域社会で孤立せずアイデンティティをもち、その地域の人々ときずなを作ることができる社会とは、様々な立場の担い手が連携や協働

図 4. 湖南市立水戸小学校さくら教室

により進められる社会のデザインとはどういったものだろうか。

5. 文化の違いにみられる人格傾向

個人差はあるが相対的にブラジル人の気質は「ラテンノリ」である。陽気でほどよく適当で、とても家族や友達想いなのだ。現在の日本が忘れかけているあたたかさを日系ブラジル人たちから感じることができる。その子どもたちは、日常的な日本語会話ができる子も多い。対してシャイで本音と建前を使い分ける我々日本人。アイスブレイクのような場を和ませるきっかけや食事や飲みの席を活用するなどで、ひとたび壁を溶かしてしまうと円滑なコミュニケーションが取れることも多い。そんな真面目で謙虚、協調性が高い日本人の幸福度ランキングは世界的にみても低く［註 7］、幸せを感じるときのいちばんの回答が「美味しいものを食べているとき」だそうだ［註 8］。そんな日本人に敷居低く国際交流イベントに参加を促せる方法の一つが食事であり、「食を通じたコミュニケーション」はまさに日本人にうってつけのアイデアだと言える。日本人のみならず、ブラジル初め世界共通して食事を共にすることは、すべての文化で信頼形成における重要なツールなのである［註 9］。

6. デザイン視点からの実証実験

多文化共生の社会的アプローチを、私はアンランゲージ（言葉の棄却）デザインと名付け、その実証実験として一つのイベントを行うことにした。「湖南市には楽しいブラジルがあるまち」と地域内外の人に、ポジティブイメージをもってもらい身体と心で感じ触れ合うのである。食事以外にも、音楽やショー、ゲームなど、コミュニケーションを取りつつ相手のことを知ることができる仕掛けも用意した。そのための祭は、「ブラジル酒場」と名づけ計画を進めた。

図 5. ブラジル酒場コンセプトヴィジュアル
（Anokhi Design）

7. 飲みニケーションの「EXPO 酒場」とは

本企画開始後、イベントを一気にスケールアップさせる一つのアイデアに出会えた。それは『EXPO 酒場［註 10］』という、2025 年開催の大阪・関西万博公式プログラムのひとつ、「TEAM EXPO 2025［註 11］」参加団体の取り組みだ。「demo expo!」という団体の企画のひとつ「EXPO 酒場」のコンセプトにある、「面白くないことを語るには『食って飲んで』が一番の方法だ」という考えが、筆者の思いと共通していたのである。私たち自身の湖南市での活動に重ね合わせた EXPO 酒場の湖南版を開催するにあたり、飲みニケーション（飲み＋コミュニケーション）を「ブラジル酒場」としてこの地域に落とし込み、再編集した。多文化共生の場での飲みニケーションを、デザイン思考で展開し「ブラジル酒場」と銘打って地域ブランディングとして昇華させた。

外国人市民が同じ場所に集い学びそして体感してもらう「フィールドパビリオン［註 12］」となれば大成功だ。2023 年 2 月 4 日（土）『ブラジル酒場』を「EXPO 酒場 湖南店　こにゃん［註 13］万博構想！ブラジル酒場」と題して実施した。

図 6. 日本語とポルトガル語のポスターを持つ

図 7. ポスターの掲示協力してくれた湖南市のまちの人々を一部抜粋

8. イベント概要・詳細

タイトル	「EXPO 酒場 湖南店 こにゃん万博構想！ブラジル酒場」
日時	2023 年 2 月 4 日（土）12:00 ～ 20:00
会場	湖南市魅力発信拠点施設 HAT（滋賀県湖南市岩根 4529-1）
最寄駅	JR「甲西駅」駅から徒歩約 30 分 会場まで無料往復シャトルバスあり
駐車場	約 200 台
参加費	参加費無料

MC	前半　井上麻子（ラジオパーソナリティ）／後半　綿谷 駒太郎（NCL 愛荘）
飲食出店者	EXPO 酒場湖南（お酒・ソフトドリンク・おでん）／スープのある日常（スープ・おにぎり）※フードトラック／ mimosa.（お弁当・焼き菓子）／ MIHO' S HERB CHICKEN（お弁当・焼き菓子）／ DONGREE COFFEE ROASTERS（コーヒー）／楽らくキッチンカー（スパイスカレー）フードトラック／健康肉饅（肉まん）／ NINA SPICE TOKYO（スパイス料理）フードトラック／チャガラ商店（たいやき）／其先（ラーメン）／ pocha（キューバサンド）／ Anokhi donuts（タピオカドーナツ）／ハクハク茶小屋（ぜんざい）／まるとしかく（日本酒・ブラジル料理）／ yamagoya（グラノーラ他）／ SANDUBAS（ホットドッグ）／ Mana Foods（パステル、コシーニャなどのブラジル料理）フードトラック／バンザイフーズ（シュラスコ・串焼き）フードトラック／ xugabake（ブラジルのお菓子）／コニャンナーレ（滋賀農業女子の野菜販売・ブラジルスナックのタピオカ販売 From 群馬））
展示・販売	EXPO 2025 ／湖南市国際協会
音楽ライブ	出町サンバ（ブラジル音楽パゴージ）／ Ave covo（ブラジル音楽 maracatu など）／よしこストンペア（音楽）
ショー	ブラジリアン柔術デモンストレーション／サンバカーニバル（アクラレラグループ）
その他	お絵かきラリー！ & くじ引き／紙芝居（紙芝居屋のガンチャン）／乾杯タイム
タイムテーブル	12:00 開場・主催挨拶 12:15 乾杯タイム① 12:20 ブラジルサンバカーニバル 12:50 乾杯タイム② 13:15 Ave covo 13:45 乾杯タイム③ 14:10 ブラジリアン柔術ショー 15:00 よしこストンペア 15:30 乾杯タイム④ 15:50 紙芝居屋のガンチャン 16:30 トークセッション demo!expo と共に考えるトークセッション 18:00 出町サンバ 19:00 乾杯タイム⑤ 19:15 クロージング挨拶 20:00 終了・撤収

イベント内企画　EXPO 酒場トークセッション

タイトル	demo!expo と共に考えるトークセッション「ブラジル酒場で考える、地方×万博。国際色豊かなローカルコミュニティの可能性」
日時	2023 年 2 月 4 日（土） 16:30 ～ 17:30
会場	湖南市魅力発信拠点施設 HAT 屋内施設
参加費	参加費無料
登壇者［註 14］	ファシリテーター：demo!expo　株式会社三菱総合研究所 万博推進室 リーダー　今村治世 ゲストスピーカー：株式会社しがとせかい　代表取締役　中野 龍馬 スピーカー：demo!expo　株式会社オカムラ 関西支社 マーケティング部マーケティング推進室 Open Innovation Biotope “bee” コミュニティマネージャー　岡本 栄理 スピーカー：EXPO 酒場 湖南店 店長（NCL 湖南）　柴﨑 寛子

協力	demo!expo ／湖南市国際協会／ SEDAI 株式会社／一般社団法人コニャンナーレ／まるとしかく／しがとせかい株式会社／KATARU
協賛	株式会社小西産業
Special Thanks	西日本旅客鉄道株式会社／イオンタウン湖南／甲西陸運株式会社
後援	湖南市／一般社団法人湖南市観光協会
企画運営	Anokhi Design　代表 柴﨑寛子
主催	一般社団法人 Next Commons Lab 湖南［註 15］

図 8.　オープニング（下原　涼介）

図 9. アクラレラによるサンバカーニバル（下原　涼介）

9.　実施結果

国際交流イベントのコミュニケーションには、相手の国の言葉を挨拶など一言でも良いので覚えることが重要だと考える。そのため関係者やスタッフには簡単なポルトガル語を覚えてもらい、積極的に声かけをしてもらうよう促した。合言葉は「Saúde!（サウージ！）＝乾杯」と決め、ポスターや広報物などに記載し、イベント内で何度も言う機会を作るための「乾杯タイム」と名づけた、声かけの時間をもうけた。

図 10. Saúde! サウージ！（Anokhi Design）

図 11.　乾杯タイムのサウージ！よしこストンペア

図 12.　乾杯タイムのサウージ！出町サンバ

図 13.　お絵かきラリー

図 14.　お絵かきラリー台紙と掲示例、会場地図（Mana Design）

図 15.　受付

図 16.　どこからきたの 分布結果（西田　巧）

乾杯タイムには、「乾杯タイムスポンサー」として会社名や事業名などを、MC から紹介してもらえる権利として、クラウドファンディングで返礼品の一つとして募り、17 件の支援があった。何度も声かけすることができたため、イベント終了後にはサウージ以外にも 2 ～ 3 言語覚えてくれた人が多かった印象だった。

また来場者が帰る頃にはブラジルの事に詳しくなっていられるよ

うに、会場内に、「ブラジル 発見お絵かきラリー＆くじびき Saiba mais sobre o Brasil Rally de desenhos」を設置した。ブラジルの地名や、有名な食べ物や文化などを記載したパネルを会場内から探し出し、台紙に描いて回るゲームだ。9個中6個以上イラストを描くと、くじ引きに参加できるものだ。そのパネルには、イラストの豆知識も列記した。景品には「Amazon 商品券」や「会場内の飲食店で使える金券」など用意したにもかかわらず参加者が少なかったのが残念だった。スタッフへの案内や参加を促す準備が不足していた。

会場入口には、「どこからきたの？シールを貼ってね De onde vc veio ?」ボードも設置した。簡素な質問にしたため、現在、住んでいる町だけではなくバックグラウンドやルーツなどの解答もあるだろうが、実に様々な土地からやってきたことがわかる。さらに会場内の人々の所在地やルーツを可視化をしたことで、このボードを見ながら話が弾むため、来場者同士コミュニケーションのきっかけとなったようだ。

EXPO 酒場では各地域の「店長」と呼ばれるいわゆる代表者を設定するのだが、湖南店店長を筆者、副店長は日系ブラジル人起業家の友人である Fábio 氏を抜擢し、日本語やポルトガル語を交えて司会とのオープニング挨拶などを行った。また EXPO 酒場のトークセッションでは、登壇者のドバイ万博や愛知万博の経験から、次の大阪・関西万博への期待や、湖南市の土地柄、国際交流の現状と課題などトークセッションを行った。

本イベントの資金調達には、PR 強化も兼ねて前述の通りクラウドファンディングを活用した。まちをあげてイベントを応援している様子をクラウドファンディングの活動報告や SNS などを通して、多くの住民がポジティブに受け止めていることを伝え波及効果を図り、イベント前日の 2 月 3 日に目標金額の 70 万円を達成した。また市の後押しもあり「西日本旅客鉄道株式会社」の無償広告枠提供が叶った。ただし駅から会場まで移動できることが条件であったため、送迎シャトルバスを用意することにした。最寄りの JR 甲西駅と会場間を走る往復シャトルバスは、日系ブラジル人向けの人材派遣会社「株式会社小西産業」にバス 1 台と運転手 1 名を協賛として提供してもらうことができた。

ポルトガル語対応は、副店長 Fábio 氏の会社である「SEDAI 株式会社」が当日スタッフを 4 名派遣してくれた。地域内外の知人友人たちにも数日前より設営や運営面、クリエイティブ面なども本業の人もいるなか友達価格で協力してもらった。

この企画に興味を示してくれた参加者の中には、東京や青森からの来場もあり、極寒の 2 月屋外ローカルイベントに当日延べ 1100 人が会場に集まり各出店店舗者の売上も、満足のいく数字が出た声もあり大成功として終わった。

図 17.　オープニング挨拶

図 18.　トークセッション告知用 WEB バナー（Anokhi design）

図 19.　トークセッション（Douglas Katsumi Sakano Fernandes）

図 20.　アクラレラによるサンバカーニバル

図 21.　ブラジル音楽 Ave covo

図 22.　Douglas Katsumi Sakano Fernandes

図 23

日本酒
冷・熱
1カップ ¥700
ハーフカップ ¥400
甘酒
¥400
AMA SAKE
saqué tradicional japonês
¥400
Beer Cerveja
¥500
¥600
肉
豆腐
¥450

図 24

Latin Gastro Bar
Raices
ペルー・南米料理店

図 25

図 26

図 27

図 28

10. 考察

ローカルな施設が、異国のお祭りのような雰囲気に包まれた。乾杯のための飲み物を持ち、持っていない人は拳を高く挙げ「Saúde!（サウージ！）」と一緒に何度も声を上げることで会場に一体感が生まれた。隣の人と乾杯をするきっかけが生まれ、多くの笑顔が見られた。同じ場で共に食事をし楽しんだことで、この文化の継続を望む声が高まった。日系ブラジル人企業からも日本人からも感謝・応援の声が届いた。

反省点としては、やはり企画決定から実施までの準備期間があまりに少なかった。実質３ヶ月間で企画のほとんどを進めたため、親和性ある小中大学生との連携も難しかった。筆者とブラジル人との間に企画に対しての話し合いも少なく、もっと踏み込んだコミュニケーションの場が用意ができなかったのが悔やまれる。「それぞれ集まっただけ」という感は否めない。

一方で私がこの取り組みを実行したことで、すでに地域活動している団体やコミュニティや企業、大阪・関西万博の関係者は敏感に反応を示してくれた。既存の地域コミュニティが手を取り合い、デザイン思考で取り組むことによって、解決の糸口に素早く辿り着けるのではないだろうか。次はこのネットワークをフル協働し未来に繋げなければいけない。

複雑さゆえに二の足を踏んでいた日本人実践者たちにとっては、チャレンジの足がかりになれば良い。地域の人たちが主体的に動けるようになり問題の解決につながるようになるのが理想だ。

11. まとめ

多文化共生のあり方を調査する活動としては2019年から進めてきているが、コミュニケーションを持てる場の設計はまだ始めたばかりである。

多文化共生の推進には、知る機会の提供、ステレオタイプの意識改革、そしてより多くの人が楽しんで参加し、対話ができ、ジブンゴトとして考えるようになる場のデザインや設計が必要だ。

この「ブラジル酒場」の取り組みをはじめとして、ひとつの目標である「フィールドパビリオン」の実現に向け、今後も長期的かつスピーディーに、コミュニケーションのデザイン、アンランゲージな言葉を超えた心をつなぐデザインの実験検証を、今よりもフィールドを拡張し様々な組織や人との連携によって実践を通して、知見を積んでいきたいと考えている。楽しさを伝染させ、地域社会の幸せのムーブメントが続くような、持続可能な多文化共生の対話方法を模索していきたい。

［註 1］ 私自身の地域おこし協力隊の任期は 2019 年 5 月から 2023 年 5 月の 4 年間、ただしそのうち 2021 年 7 月から 2022 年 7 月は産休育休をとった。

［註 2］ 湖南市．滋賀県湖南市人口統計と外国人国籍別人員数上位 3 か国より．（https://www.city.shiga-konan.lg.jp/shisei/gaiyo/tokei/jinkou/index.html）2023 年 12 月 22 日閲覧

［註 3］ 滋賀県．滋賀県における国籍別外国人人口（2021 年 12 月末現在）．（https://www.pref.shiga.lg.jp/file/attachment/5390413.pdf）2023 年 12 月 15 日閲覧

［註 4］ 湖南市多文化共生推進プラン With KONAN Plan3（案）（2022年02月現在）．（https://www.city.shiga-konan.lg.jp/soshiki/somu/jinken_yogo/2_1/tabunkapuran/25638.html）

［註 5］ 湖南市国際協会．（https://konan-ia.org/）

［註 6］ 外国籍を有する湖南市民、または日本国籍保持者で外国にルーツをもち湖南市に生活拠点を有する人とする。湖南市の湖南市多文化共生推進プラン With KONAN Plan3（案）に基づく。

［註 7］ World Happiness Report（世界幸福度報告書）．2023 年（https://world-happiness.report/ed/2023/）2023 年 12 月 15 日閲覧

［註 8］ 株式会社ヒューネル．幸福度に関するアンケート調査結果！男女 500 人に聞いた幸せの為に必要だと思うもの第 2 位は「健康」！第 1 位は？．（https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000014.000108703.html）2023 年 12 月 15 日閲覧

［註 9］ エリン・メイヤー．異文化理解力―相手と自分の真意がわかる ビジネスパーソン必須の教養．第 1 版．東京，英治出版株式会社，2015 年，320P.

［註 10］「大阪・関西万博」の「TEAM EXPO 2025」に参加する有志団体チーム「demo expo!（現　一般社団法人 demoexpo）が企画する取り組みの一つに「EXPO 酒場」がある。

［註 11］ 2025 年開催の日本国際博覧会「大阪・関西万博」で「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、地域や民間企業に各種団体が参加しやすいよう設けられた公式ブログラムのひとつ「TEAM EXPO 2025」。

［註 12］ 持続可能でよりよい世界の実現に向け、世界共通の目標である SDGs の視点から地域の「活動の現場そのもの（フィールド）」を地域の人々が主体となって発信し、多くの人を誘い、見て、学び、体験もらうもの。交流を通じて価値を高める取り組みを指す。

［註 13］ 湖南市になぞらえた名称。2011 年から約 10 年間、動物愛護や観光振興を目的に湖南市観光協会が実施してきた犬と猫の仮想都市「こにゃん市」があり、様々に活用され「こにゃん」の名称は、市民にとって馴染みがある名詞となっている。

［註 14］ 敬称は開催当時のものとする。

［註 15］ 一般社団法人 Next Commons Lab 湖南（NCL 湖南）とは、2016 年に岩手県遠野市で始まった Next Commons Lab（NCL）に所属する一団体である。NCL が地域おこし協力隊制度を活用して全国約 10 箇所に拠点を持ち、ローカルで起業するという新しい選択肢を提示しようと実験や実践を行っている。NCL 湖南では、9 名のプレイヤーが湖南市で起業し事業を行っており、そのプレーヤーのサポートや行政・民間企業・地域住民との橋渡しや相談役となるコーディネーターの 3 名の合計 12 名で構成される。2023 年 6 月に最後のメンバー 1 名が任期終了となり全 11 名が任期を終えている。現在構成メンバーとしては代表のみとなる。（1 名は 2 年目で退任）

【参照図書】

今中博之．社会を希望で満たす働きかた ソーシャルデザインという仕事．第 1 版．東京，朝日新聞出版，2018 年，240P.

issue+design project．地域を変えるデザイン―コミュニティが元気になる 30 のアイデア．第 1 版．東京，英治出版株式会社，2011 年，288P.

筧裕介．ソーシャルデザイン実践ガイド―地域の課題を解決する 7 つのステップ．第 1 版．東京，英治出版株式会社，2013 年，352P.

筧裕介．持続可能な地域のつくり方――未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン．第 1 版．東京，英治出版株式会社，2019 年，424P.

田中淳一．地域の課題を解決するクリエイティブディレクション術．第 1 版．東京，宣伝会議，2022 年，273P.

前野隆司．幸せのメカニズム 実践・幸福学入門．第 1 版．東京，講談社現代新書，2013 年，260P.